

「ザ・ヨシトランド アニマルスーツづくり！！」

1 趣 旨

- ・交流の家での生活を通して、家族の絆を深めることや時間を守るなどの基本的な生活習慣を確立するきっかけづくりを行う。
- ・体験活動を通して、物事に積極的に取り組む意欲や自己肯定感を養う機会とする。

2 事業の概要

- (1) 期 日 10月3日(土)～10月4日(日) <1泊2日>
 (2) 会 場 国立三瓶青少年交流の家
 (3) 講 師 紙芝居作家・紙芝居師 よしと 氏
 (4) 対 象 小学生とその家族
 (5) 参加者 55名(子ども30名 大人25名)
 (6) 日程・内容

	13:30	14:00	14:30	16:30	17:30	19:00	20:00	22:00
1日目 (土)	受付	はじまりの会	「アニマルスーツを作ろう！」 段ボールを切って貼って・・・。 自分だけのアニマルスーツを作るよ。	夕食・入浴	「みんなで キャンプファイヤーだ！」 火を囲んで、よしとさんとレクリエーションを楽しみます。		自由時間 入浴 就寝準備	就寝

	6:30	8:40	9:00	11:00	11:30
2日目 (日)	起床 朝食	退所 点検	「動物になって森へ行こう！」 終点サヒメルでは、アニマル博士のお話とよしとさんの紙芝居ライブがあるよ！	おわりの会	

3 事業の特色

(1) プログラムデザインのポイント

- ①事業当日までに、「アニマルスーツ」の題材にする動物を家族で決め、その動物の図鑑等を持参することと、スーツの材料の一部を作ってきてもらうことを事前に伝えることで、参加者に事業への期待感を高め、想像力を膨らまして当日に臨むことができるようになった。
- ②昨年度のプログラム展開を引き継ぎ、テーマを「昆虫」から「動物」に変更した。
- ③子供たちの興味関心を高めるために、1泊2日の中で「テーマ」に沿ったつながりのあるプログラムを設定した。

(2) 運営のポイント

- ①昨年度のプログラム展開を引き継ぐことで、前回課題として上がった点(時間配分等)を改善し、より良い運営に役立てることができた。
- ②コロナ禍の中、創作活動を長時間室内で行うことを考慮し、募集人数を当初予定の2/3程度に抑えた。
- ③当日の運営については、密閉空間を避けるためメイン会場の講堂では換気を常時行った。
- ④参加者の密集を防ぐため、貸出道具の場所を一定の距離を保ち配置した。また、夜のキャンプファイヤーのゲームでは、極力参加者同士の接触を防ぐ配慮を行った。
- ⑤事業2日目の「島根県立三瓶自然館サヒメル」において、参加者がお互いに創作したスーツの

特徴や創作に至った経緯を発表し、学芸員からスーツのモデルにした動物の説明を聞くことで、動物に関する専門的な知識を得ることができた。

⑥この一連の流れを通して、自分の意思を相手（参加者や学芸員）に伝えることと、伝えたいことが相手から理解され認められることにより、自己肯定感を高める機会となった。

⑦最後は、講師のよしと氏が参加型の紙芝居を行い、親子で大いに盛り上がることができた。

(3) 広報のポイント

①島根県全域の小学校1～3年生にチラシを配布した。

②島根県立図書館を通じて島根県内の図書館へ配布を行ったことで、図書館で事業のチラシを見たとの回答があった。

③山陰中央新報社が発行する生活情報応援誌「りびえーる」にも募集案内が掲載された。

④これらの広報により募集定員の2倍越えの申し込みを得ることができた。

4 参加者へのアンケート結果

(1) アンケートの集計 (%)

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	100	0	0	0
プログラム	100	0	0	0
運営	95	5	0	0
職員の対応	95	5	0	0

(2) 参加者の声

- ・自分のアイデアで素敵な作品ができました。最後の紙芝居も参加型は初めてでとても楽しめました。
- ・アニマルスーツを作るだけでなく、キャンプファイヤーや紙芝居など色々あってとても楽しかったです。コロナの関係でコミュニケーションが難しいけど、子供たちはすぐに仲良くなれて素敵なイベントでした。

5 成果と課題

《成果》

- ・当事業では、当所に初めて来たという家族が多く、その家族がリピーターとなって別の事業に参加したり、「三瓶にまた来たい」と回答した家族がいたり、今後の利用促進につながった。
- ・近隣にある「島根県立三瓶自然館サヒメル」と連携して活動することで、互いに利用者の拡大につなげることができた。また、本事業を通してサヒメル担当者とも関係を深めることができ、今後のさらなる連携強化につなげることができた。

《課題》

- ・多数の応募があったが、新型コロナウイルス感染防止のために、受入人数を制限しなければならなかった。感染予防に配慮しつつ、より多くの方に体験活動を提供するために、他に手だてがなかったのかを再検討したい。



(担当：事業推進係主任 渡邊 絵里子)